

研修報告 E班2グループ 浜名湖E-2

1. はじめに

当グループは、研修にて受講した講義内容を元に、ICTを一つのツールとして活用するという観点から、我々大学職員がどのように学習環境等の整備や社会への要求に対応するか議論を行った。地域性においても、その成り立ちにおいても異なった大学の職員によって構成されたグループであることから、各々の業務内容を踏まえた意見を交わしあうプロセスは、相互にとって示唆に富むものであった。

2. テーマの把握および討議内容

テーマは、①教育情報の公表および②教育の質的転換であった。次の表に、教育情報の公表に関する当グループの議論をまとめた。

教育情報の公表について		
視点	問題点・理由等	対策等
情報公表の目的	ステークホルダーから信頼される大学になることを目指すべき。	他校との違いをアドミッション・ポリシーの整備等で明確化する。
情報公表の現状	情報を詰め込み過ぎて逆にHPが見づらい。事業報告書等の読み手として誰を意識しているのか不明確。	大学の教育方針等に基づく情報の絞込み。読み手を意識しつつ、各情報にストーリー性と関連性を持たせる。
教育情報の公表における各部署の合意等	公表に際しての部署間での合意形成が存在しない。	公表内容についての自覚および一定のポリシーに基づく一貫性ある公表が必要。

上記のように、情報過多であることが再三指摘された。HPや事業報告書が読み手を意識した仕上がりになっていないため、読み手を遠ざけているとの意見も多く、誰が、誰に対して、どのような目的をもって情報を公表していくかを明確化することが重要であるとの結論に至った。その過程で、情報内容の保証、つまり内容の確実性および実行性が担保されていることや、教員と協働しつつ改革を達成する姿勢や情報の価値、ステークホルダーのニーズを理解する資質が職員に必要であることも認識した。

②教育の質的転換についても、以下の表にまとめたような議論を行った。

教育の質的転換について		
視点	問題点・理由等	対策等
質的転換の必要性・理由	大学に求められる役割が変化（「知識蓄積型人材の育成」から「答えのない問題に立ち向かう人材の育成」へのシフト）している。	授業方法の改善等（下記参照方）
必要とされる準備	大人数形式の授業が「一方通行」であり、従来の方法論が陳腐化している。	主体的な学びを支援する、体系的カリキュラムの導入と提示が必要。
ICT活用策	一部大学では、ICTを活用することにより学生の授業理解度を向上させた事例がある。	ウェブシラバスでの科目リンク、タグによる科目の関連性の視覚化、学生の修学状況のDB化等（詳細はスライド参照方）
職員の役割とは	従来のような「事務屋」という自己認識では、大学改革を実現できない。	主体的に取り組む職員が育つ環境整備

教育の質的転換を議論するにあたって、従来の知のあり方（知識蓄積型）から新しい知のあり方（答えのない問題に立ち向かうための学修）への転換の必要性は、学士課程教育の内実が見直され、広範な議論を呼んでいる中、グループの各々が共有する問題意識であった。

このような検討を行ったうえで、当グループは課題の解決に向けて次の通り議論を深めた。

3. 課題の解決に向けて～当グループの提案～

これまで意見を交換していた情報の公表および教育の質的転換は、相互に関連する課題であり、公表された情

報内容の正しさを保証するだけでなく、一層の改善を図るためにも、教育の質的転換を行うことはもとより、さらにその内容を維持向上させる必要があるものであって、換言すれば、所謂 PDCA サイクルを循環させていくために、双方が鏡となるものである。

このような関係性を維持するためには、次の方策が適切であると考えた。

- ・情報の公表においては、ステークホルダーのニーズを明確化したうえで、各大学が自らの特色を明確化し、情報提供にストーリー性を持たせる。これは、「本学に入学した場合、どのような学びができるか」を分かりやすく訴えるものであり、単なる「法令で義務付けられた情報公開」といった、ややもすれば強制感の伴う作業の先へ眼差しを向けるものである。

- ・情報公表において「学びのストーリー」を明らかにしたうえで、教育の質的転換を図る。上述のように、ウェブシラバスのリンク、タグ付け、学びの内容のチャート化等に加え、卒業生の履修状況や就職先、特徴などを DB 化し、在籍する学生が学修を深めるうえでの指針とする。

- ・これらを実行するうえで、職員各々の意識付けが重要である。情報の収集は簡単かもしれない。だが、その意味付けのプロセスでは職員の力量が問われる。社会からの要求を察知することが何より重要であり、そのためには、他大学の講義の聴講等、我々の成長を促す教育体制を整備することが望ましい。

4. 省察

グループ内で今回の研修を振り返り、次のような声が挙がった。

- ・議論を行う中で、自分が実行可能なこと、他部署との連携が必要なことの整理ができた。
- ・自大学の特殊性を認識した。
- ・情報公開や教育の質的転換は、縦割りの業務分掌では対応しづらい。主体性が重要。
- ・教員、職員の協働の難しさを理解した。

今回の研修により、各々が日々直面している課題を改めて客観的に見つめなおしたり、あるいは問題解決へのヒントを得た模様である。2泊3日と限られた時間ではあったが、今後の大学職員のあるべき姿を考えるにあたり、極めて貴重な講習会であったと考える。